

<実践報告>

附属学校園を地域にひらく：
2012年度教員研修プログラム『学びのワークショップ』成果報告

大藪 勝 信州大学教育学部附属長野小学校
 橋爪 祐一 信州大学教育学部附属長野中学校
 小林貴久子 長野県上田養護学校
 小島 哲也 信州大学教育学部特別支援教育講座

Opening Affiliated Schools to Community:
2012 Annual Report of Teachers' Development Program "Workshop for Learning"

OYABU Masaru: Nagano Elementary School, Faculty of Education, Shinshu University

HASHIZUME Yuichi: Nagano Junior High School, Faculty of Education, Shinshu University

KOBAYASHI Kikuko: Ueda Special Needs School, Nagano Prefecture

KOJIMA Tetsuya: Special Needs Education, Faculty of Education, Shinshu University

研究の目的	附属学校園における教員研修プログラムの実践とモデル開発
キーワード	附属学校 教員研修 プログラム
実践の目的	附属学校園の教育実践・研究の発信，地域貢献
実践者名	教育学部附属学校（長野地区）
対象者	長野県内の小学校，中学校，特別支援学校の教員
実践期間	2012年5月～2013年3月
実践研究の方法と経過	教育学部附属学校（長野地区）において，県内の小・中・特別支援学校教員を対象にした研修プログラムをワークショップ形式で実施した。各校の1年間の取り組みの成果をまとめた。
実践から得られた知見・提言	今回の教員研修プログラムは，附属学校園を地域の教員（学校）へひらき，教育実践・研究の成果を発信し，共に学び合う場をつくることを目的とした。その結果，各校とも研修参加者からプログラム内容に対する好意的な評価が得られた。今年度の成果と課題をふまえ，2013年度以降は松本地区附属学校園へ拡大して継続実施する。

1. はじめに

信州大学教育学部附属学校園における教員研修プログラムは、信州大学の新たな教員養成改革事業「長野県の現代的な教育課題に対応した附属学校における教員養成・研修の充実」の一環として、附属学校園の教育実践と研究の成果を地域へ発信し、教員同士の共同による学びの場を創りだすことを目的に行われている。2012年度は取り組みの初年度にあたり、長野地区の附属学校(小学校, 中学校, 特別支援学校)において、小・中学校の教科・領域の指導における参画型授業研究のあり方、特別支援教育における個別ニーズに応じた支援方法をテーマとし、ワークショップ形式の研修を実施した。本稿では、2012年度の各校における取り組みの概要を報告する。

この教員研修プログラムは同時に、信州大学法人の中期目標「地域に根ざした研究と人材育成を実施し地域振興に貢献する」、および「生涯学習の支援と社会人再教育を推進する」に直接関わるとともに、附属学校園の中期計画「先導的な教育研究を推進し特色ある学校運営を行う」を推進する具体的方策の一つに位置づけられている。そのため、附属学校園では2012年度の成果をふまえ、2013年度以降は松本地区附属学校園へ拡大して継続実施し、長野県における地域の教育ニーズに対応できる教員研修のモデルカリキュラムを開発し、その活用法を提案する予定である。

2. 2012年度プロジェクトの運営体制(表1)

2012年度は、各校副校長(3名)が研修プログラムの実施責任者となり、その下で各校の教員チーム(各校代表が第1～3著者)がワークショップの企画・実施を担当する運営体制をとった。これら附属学校メンバーの他に、各校の教育研究に継続して関わっている学部教員3名がプログラム開発の指導助言者として加わり、附属学校運営委員会副代表の学部教員(附属特別支援学校長、第4著者)1名がプロジェクト全体の統括責任者として参加した。

表1 2012年度プロジェクトの運営体制

氏名	所属・役職	役割
小島 哲也*	教育学部・教授	プロジェクト全体統括責任者
畔上 一康	附属長野小学校・副校長	長野小学校研修プログラム実施責任者
大藪 勝*	附属長野小学校・教諭	同 ワークショップ企画チーム代表
伏木 久始	教育学部・教授	同 研修プログラム開発指導担当
小松 寅雄	附属長野中学校・副校長	長野中学校研修プログラム実施責任者
橋爪 祐一*	附属長野中学校・教諭	同 ワークショップ企画チーム代表
酒井 英樹	教育学部・教授	同 研修プログラム開発指導担当
勝山 幸則	附属特別支援学校・副校長	特別支援学校研修プログラム実施責任者
小林 貴久子*	附属特別支援学校・教諭	同 ワークショップ企画チーム代表
宮地 弘一郎	教育学部・助教	同 研修プログラム開発指導担当

*本報告書の執筆担当

3. 各校の研修プログラムの内容と成果

3.1 附属長野小学校

(1) 研修プログラムのねらい

これまでの本校における教材研究会では、授業を行うにあたって、指導案とともに授業者がそこで向き合う教材について文章でまとめたものを問い合わせというものであった。授業者がまとめた「言葉」を手がかりに、子どもの学びを思い描こうとしていた。しかし、見つめる教材が「言葉」で表現されているため、会に参加するものにとっては、教材のとらえがその表現力に左右されたり、そこでの表現方法について問い合わせ時間になってしまったりということが課題としてあった。また、実際に授業が進んでいる中で行われるので、教材についての新たな価値が見えてきたとして、新たな授業展開へと反映させていく難しさがあった。

そこで、教材研究会の在り方そのものを見直し、体験参加型の教材研究会として、以下の考えのもとに進めていくことにした。①授業者だけでなく、会に参加するもの全員が、その教材に実際に触れる時間を大切にする。②授業者が指導案を書く以前に、教材の価値を見つめていく時間を持つ。③教材研究会を公開し、本校以外からの参加を募る。

(2) 実施内容 (表 2)

6教科について各1回ずつ全6回、平日の夕方に実施した。各回とも一ヶ月前には教材研究の準備をするとともに、リーフレットやホームページで広く参加を募った。

表2 研修プログラムの概要 (長野小学校)

回	教科	内容
第1回 10月17日	道徳	3年間共に過ごしてきたニワトリさんとの暮らしを劇にしたいと願った子どもたちを思い描きながら、市民劇団に入団した担任とともに、演劇の世界を味わった。
第2回 10月19日	算数	凧の骨組みにある美しさ、その美しさのもとになっているもの、子どもたちが感じる決まりの良さ。実際に凧を揚げながら、よく揚がる凧とその美しさの関係を味わった。
第3回 12月11日	国語	ミニブタのクーちゃんが7頭の赤ちゃんのお母さんになった。子どもたちは、赤ちゃんの抱っこやクーちゃんが大好きな場所『岩山』までのお散歩をしながら、日に日に大きくなっていく赤ちゃんを感じている。クーちゃん、赤ちゃんを見て触れて感じたことから、あふれる言葉の世界を共に味わった。
第4回 12月13日	体育	友にパスを出し、パスを受け取り、シュートにつなげる。ボールをつなぐという意味を求めながら、共にいる教師がこの運動の魅力をどうとらえていけばよいのか。ハンドボールを実際に行いながら、子どもの学びの可能性を語り合った。
第5回 1月10日	社会	長野市に生きる子どもたちにとって当たり前のようにある善光寺も、調査してきたことや地図、新たな事実との出会いにより、それまでとは違ったものに見えてくる。教師も共に、もう一度、善光寺を味わい直し、様々な視点で白地図に表しながら、そこで感じた魅力を語り合った。
第6回 1月11日	生活	タンポポの綿毛や綿など、様々な「ふわふわ」で遊び込んだ子どもたちが出合ったアルパカの毛。そのただならぬ心地よさから「アルパカさんと一緒に遊びたい」「ふわふわのアルパカさんに会いたい」と願い、アルパカと暮らす子どもたち。エサづくり、散歩、小屋掃除。その1つ1つで感じるアルパカの仕草や息づかい。子どもたちが日々感じているアルパカの魅力を味わった。

(3)参加者

長野県内の小・中学校の教員 28 名（20 代の男性 5 名，女性 5 名；30 代の男性 4 名，女性 1 名；40 代の男性 9 名，女性 4 名）。

(4)参加者の意見・感想

ワークショップに参加した方々から毎回，意見や感想を書いてもらった。その一部を以下に引用する。

○先生方のお話を聞きながら，これまでの自分を振り返っていました。やり残してきたこと，これからもっとやりたいこと。子どもたちと早く会いたくなりました。

○この会に参加して本当に良かったと率直に思いました。教師の悩みをもとに，それを共に感じながら深め，一人ひとりの先生が自分のものとしてとらえていく研究のスタイルに感動を覚えました。



写真 1 長野小学校・第 2 回ワークショップ
(参加者全員で教材を実際に触れてみる)

○教材化とは，見えないものを見えるようにすること。教師のしているものが，子どもと同じになっていくようにすることだと思いました。

○自分の求めている世界，大事にしたい世界がここにはある。子どものこと，教材のこと，授業のこと，それぞれ先生方が大事にしていることや思いに触れ，毎日流れるように過ぎていく忙しさの中で，大事にしていきたいことを思い起こさせていただいた。

(5)まとめ

外部の方には教材研究から参加していただくことで，授業研究会にも参加していただくことにつながり，子どもの姿をその授業の 1 時間だけでとらえるのではなく，長いスパンの中で，子どもの学びの変容や育ちをともに学びあうことができた。また，本校職員にとって，外部の方にこうした研究のスタイルを広げていくということ以上に，われわれがそうした方の考えに学ぶことが大きいということを実感している。

校内だけでは，意図せずとも，日常の雰囲気や，それまでの研究の流れを感じ，いつしか枠の中で材を見つめようとしてしまうこともあった。また，授業者を通して材を見つめることで，そういうものとして材をとらえてしまうこともあった。今，多くの先生方と共に，材を見つめ，味わうことで，わたしたち自身もそのようなとらわれを捨て，材そのものの価値に出合える体となっていった。それは，授業者にとっても，子どもたちにとっても，その材からの学びの可能性がより大きいものになっていったことを意味しているといえよう。

3.2 附属長野中学校

(1) 研修プログラムのねらい

本校の研究推進のための教科会を公開することを通して、研究推進の仕方や授業づくりのあり方を提示し、県下の現職教員の資質能力の向上に寄与する。現在行われている「夏季研修会」「秋の公開（連合教科研究会のための授業公開）」「連合教科研究会」をプログラムに位置づけ、その過程を公開する。このことにより、参加者（現職教員）が研究を推進していくための流れを学び取り、自校の研究推進の基盤とすることができる。また、その中で、ひとつの授業を附属学校の教員と一緒に作り上げたという一体感を感じ取り、自校の研究推進に対する意欲をもたせる。

(2) 実施内容（表 3）

表 3 の日程と内容で、年間計 4 回のワークショップ（英語科）を実施した。

表 3 研修プログラムの概要（長野中学校）

回	内 容
第 1 回 8 月 2 日	ガイダンス 同じ長野で英語を教える仲間として、共に研究を進めていくことを目的とするプログラムであること。英語科の輪を広げていくことが目的であること。「書くこと」の授業の構想と各校の授業実践プランの作成。
第 2 回 8 月 10 日	新しい教科書のアプローチの仕方の情報交換 秋の公開に向けた授業構想（「書くこと」の学習のあり方）。参加各校の授業実践プランをもとにした情報交換。共同研究者（教育学部・酒井教授）による新学習指導要領における「書くこと」の授業のあり方の助言。
第 3 回 9 月 25 日	秋の公開研究への参加 研究テーマ「まとまりのある一貫した文章を書く力を高める指導のあり方」
第 4 回 11 月 22 日	連合教科研究会への参加と情報交換

(3) 参加者

長野市内の中学校の英語科担当教員 3 名（40 代男性 1 名、30 代男性 2 名）

(4) 参加者の意見・感想

ワークショップに参加した方々から毎回、意見や感想を書いてもらった。その一部を以下に引用する。

本校研究に関する意見

○いろいろ工夫されていると思う。刺激になる。もっと思い切って最先端の研究をしていただき、現場の学校をリードしていただきたい。（40 代・男）

○書かせる指導は現場でも困っているところです。ぜひ、私たちの授業作りに参考になるような研究を進め、公開授業で提案をしていただきたいと思います。（30 代・男）

○ライティング指導に焦点を当てて研究を進めているのはとてもよい方向です。ただ 1 年生の段階では分析的な方向に偏りがちな感じもします。もう少しアバウトな指導でいいのではないかと。書くことは誰に読んでもらうのかという相手意識がもっと大切なのではな

いか、と思います。春の公開に向けてつめていただき提案していただければと思います。
(30代・男)



写真2 長野中学校・第2回ワークショップ
(各校の授業実践プランを元に情報交換を行う)

ワークショップに関する意見

○ とても大きな刺激になりました。こういう会なら月に1度くらいでやってもいいように感じています。2回のワークショップの後は、研究会への参加のみとなっています。もったいないと感じますので、ぜひ回数を増やしていただければと思います。(40代・男)

○ とてもよい機会を与えていた

できました。このような少人数でお話いただけたこと、具体的なアドバイスを酒井先生から教えていただいたことなど、大変貴重な経験でした。(30代・男)

○少人数で学びあうことは新鮮で大変刺激になりました。第1回のワークショップは参加できませんでしたが、参考になることがいろいろ聞けてよかったです。(30代・男)

(5)まとめ

少人数による焦点的な話し合いになり、公立学校の現場で悩んでいる課題を考えあうことができた。本校の公開に向けた英語の授業作りを材料に、「書くこと」の学習のあり方について具体的に学びあうことができた。学びのワークショップ参加者が、本校の英語教育について興味をもち平成25年度研修教員として本校に転任してくるなど、公立学校と本校との人的な交流を図ることもできた。また、授業作りを一緒に考えてきた仲間として平成25年度の春の公開研究にも参加していただいた。英語科では、本年度教科書の出版社が変わり各校ともどのような授業実践を進めていけばいいのか迷っていた部分も多かった。本校の教科会の中で、具体的に教科書をどのように扱いながら「書くこと」の実践を行っていくのか、また、新学習指導要領で求める力はどんなものなのかを共同研究者の酒井教授から指導いただくことにより、自校の授業づくりに生きるワークショップとなった。来年度は、ワークショップの教科を可能な限り広げ、長野地域の現職教員の資質能力の向上に寄与したい。

3.3 附属特別支援学校

(1)研修プログラムのねらい

本校における児童生徒の実態把握、評価、個別の教育的ニーズに応じた授業づくり、支援の実際について、子どもの思いや願いに共感することを視点に、授業参観や研究協議を通して学ぶ。また、研修者の授業づくりや支援にかかわる個人課題や実践を持ち寄り、情

報交換・意見交換などを通して課題解決を図る。

(2)実施内容 (表 4)

年間計 5 回のワークショップを通して、小学部における研究と実践事例に焦点をあて、①生活単元学習を基盤とした教育実践の意義、方法、および課題について (講師：小学部研究主任、小学部主事、授業担当者)；②児童生徒の実態把握と支援のためのエピソード分析 (講師：小学部研究主任、対象事例の担任、授業担当者)、および、VTR を用いた行動解析と環境分析 (講師：教育学部・宮地講師) の方法、について学んだ。

表 4 研修プログラムの概要 (特別支援学校)

回	内 容	
第 1 回 10 月 11 日	<午前> ・研修趣旨の説明 ・授業概要説明および事例 (小学部 3 年男子) の紹介 ・授業参観…生活単元学習, PLUS (事例の個別学習), 給食準備	<午後> ・講義/附特における実践スタイル (生活単元学習の基本理念) の説明と、授業・学校生活でのエピソードにもとづく子どもの実態把握について ・演習/VTR 分析による子どもの実態把握について
第 2 回 10 月 27 日	<午前> 公開研究会と合同実施 ・公開授業 (小学部生活単元学習) の参観および授業研究会への参加	<午後> 公開研究会と合同実施 ・公開研分科会「生活単元学習における子ども理解—VTR 分析からみえること—」への参加と発表 (指定討論)
第 3 回 11 月 27 日	<午前> ・個別課題 (事例の VTR 分析) の中間報告	<午後> ・討論/学校生活づくりと授業づくり ・講義/状況が子どもの活動に及ぼす影響
第 4 回 2 月 5 日	<午前> ・授業参観 (生活単元学習) ・VTR 参観 (PLUS)	<午後> ・討論/2, 3 学期の生活単元学習の比較, および子どもの育ちとの関連性について; 生活単元学習 - PLUS の相互相互作用と子どもの発達援助について
第 5 回 3 月 1 日		<午後> ・個別課題の最終報告会 ・今後の研修に向けた意見交換

(3)参加者

長野市内の養護学校 (知的障害) 中学部教諭の 30 代男性, 千曲市内の養護学校 (知的障害) 中学部教諭の 30 代男性, 須坂市内の中学校 (知的障害特別支援学級担任) 教諭の 40 代女性, 各 1 名. 計 3 名.

(4)参加者の意見・感想

ワークショップ最終回に今後の研修に向けた意見交換を行うとともに, 全体を通しての感想を書いてもらった. その一部を以下に引用する.

○この研修を始めた頃は, 今の自分の力量では何の成果も出すことができないと思っていましたが, 宮地先生をはじめ附属の先生方のお話や取り組みを聞いたり, 自分なりのテーマをもって授業参観や指導案, VTR を何度も見せていただいたりしていると, 子

どもの姿からわずかでしたが見えてくるものがあったように感じました。(30代・男)

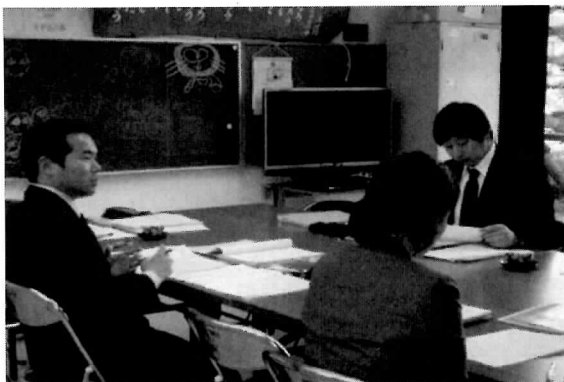


写真3 特別支援学校・第3回ワークショップ
(VTR分析に関する個別課題の中間報告)

○ビデオ分析により、こどもの行動を客観的にみて整理することができ、その行動の背景にあるものは教師の関わり方なのか周りの状況なのか、遊具なのか発達段階からの行動なのか、など考えていく方向や視点を示していただけでよかった。今後の授業作りや生徒への関わりの中で生かしていける内容だったと思います。(30代・男)

○エピソードに基づく子供の実態

把握やビデオ分析における子供の実態把握については、とても興味深い内容で勉強になりました。私自身も子供の把握の仕方に対する考え方が広がりました。(40代・女)

(5)まとめ

附属特別支援学校には、特別支援教育についての研究・実践を通じて、地域の学校や先生方の特別支援教育に係る研究や支援力の向上を図るために研修の機会を提供する役割がある。これまでは公開研究発表会が主たるその機会であったが、今回新たに本校の日々の授業実践を公開したり、事例生のエピソードに基づく実態把握やビデオ分析を本校職員と一緒にに行ったりすることで、ワークショップのねらいであった「本校からの発信、共に学ぶ」ことが達成できたと考える。ただ、忙しい校務の中を5回のワークショップに継続して参加することはなかなか難しいこと、参加者の年代やキャリアによりそれぞれの研究ニーズが異なること、などが反省から明らかになってきた。そこで、更に参加者の期待に応えられるようなワークショップの在り方の検討が必要となっている。例えば、研修内容の希望を事前につかむこと、研修回数・時間・期間、研修スタイル（個人追究型、グループ型）などの検討が挙げられる。次年度も検討を重ねながら、地域に根ざしたワークショップとなり継続していけるよう努めていきたい。

【付記】

今年度の教員研修プログラムを実施するにあたり、長野県教育委員会、長野県（市）校長会、その他の県内教育機関・団体のご支援、ご協力をいただきました。また、公務ご多忙の中、毎回のワークショップに各地から参加していただいた先生方に、感謝申し上げます。

(2013年6月28日 受付)